

活動報告

愛知県立大学大学院学生自主企画

第4回国際文化研究科ポスター発表会

実行委員／愛知県立大学大学院国際文化研究科国際文化専攻博士後期課程

木戸志緒子

2021年10月30日(土)から11月30日(火)の1ヶ月間、本学大学院生から成る国際文化研究科ポスター発表会実行委員会主催、多文化共生研究所共催で「第4回国際文化研究科ポスター発表会」を開催した。4年目となる本発表会の趣旨は、分野を越えて討論や交流のできる場所を学内で創出し研究をさらに広い視点から捉え直すことである。

昨年度は、Covid19の感染拡大の影響で講義がオンラインになりさまざまなイベントが中止、学内外の院生たちが、外出自粛をしている状況下で運営継続を検討し、学内展示とオンライン展示を同時開催、口頭発表はオンラインで実施した。今年度は、通常の対面開催を想定し、初めて県大祭の1企画として5月初旬に申請後準備を始めた。しかし、愛知県内の感染の収束が見られない中、8月中旬に県大祭の全面オンライン開催が決定したため運営方法を急遽変更した。その後、緊急事態宣言が解除され、口頭発表を対面でできる可能性が浮上し、再び検討し通常講義内に実施できるように準備を進めた。

その結果、オンラインは観覧申込がのべ30名以上となり、関東、近畿、四国、カナダ等国内外から観覧できる利点が功を奏した。例年と同様に本発表会は、国際文化特殊演習bクラス(合同ゼミb)の講義と連動し、ポスターの作成、教員による指導、ピアラーニングなどを行った。また、本校だけでなく他大学院の院生も展示のみ参加した。講義内の口頭発表は11月4日(木)に発表者3名、院生2名、教員6名が参加し、活発な意見交換がされた。

以下にオンライン及び学内展示(H棟地下通路)の発表者7名の氏名、所属(当時)、タイトルを示す。

馬場 由美子(国際文化専攻 M1)

「ウルグアイの日系2世－社会的統合の近未来」

橋本 智恵(国際文化専攻 M1)

「医療従事者の外国人住民に対する『ことばの壁』」

－予備調査:コロナ感染拡大前後の中での、非日本語母語話者への言語対応状況

野田奈保美(国際文化専攻 M1)

「地域日本語教育の変遷・現状・課題」

木戸 志緒子(国際文化専攻 D3)

「在日留学生在日本社会で求める人間関係に関する PAC 分析
-3 回の留学経験を経て意識変容した大学院生の事例」

ルブリーヴァ・ナターリヤ(国際文化専攻 M2)

「日露両言語のインターネットスラングについて—ツイッターの投稿を中心に」(2020 年度展示より)

多田 隼人(県大 OB、名古屋大学大学院国際開発研究科 M2)

「タイにおけるコーヒー生産が地域に与える社会経済的な影響」

岡崎 雅子(県大 OG、南山大学大学院研修生)

「アステカ人はいかに戦ったか—古文書から読み解く実像」

観覧者オンライン約 30 名、学内展示推定 200 名(申し込み数、および「いいね」シール参考)

今年度の観覧手順は以下のようになった。

- ①告知チラシの QR コードから申し込みをする。
- ②観覧手順をメールに返信する。
- ③県大祭のプラットフォーム(写真1⇒サークル紹介⇒第 4 回国際文化研究科ポスター発表会⇒外部リンク⇒パスワード

外部リンクをクリックすると JIMDO で作成したホームページに移動し、タイトルを選択してポスターを観覧でき、発表者自身による 5 分前後の音声紹介を聞けるようにした。セキュリティの面ではホームページのパスワード、ポスターのダウンロードおよびコピー禁止などの設定をした。学内展示では、昨年の中合同ゼミ b での振り返りを生かし、ポスターにシールを貼ってもらい観覧者の関心を高めるようにした。

セキュリティに配慮したため観覧手順が煩雑になったが、30 名以上の観覧者が訪問し、そのコメントを掲載したり、発表者や実行委員会が回答したりして双方向の意見交換ができた。



写真1 オンライン県大祭画面(2021年10月30日、実行委員撮影し引用)

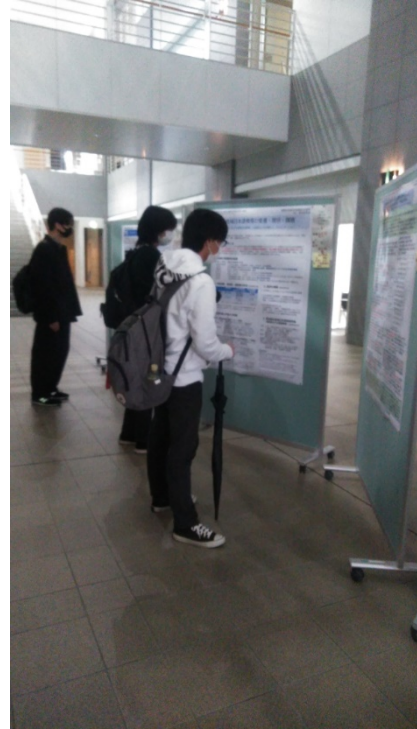


写真2 学内展示会場風景
(2021年11月9日、実行委員撮影)



写真3
観覧者が貼る「いいね！」シール(2021年11月9日、実行委員撮影)

観覧者の声

- ・ ウルグアイ日系社会の軌跡と現状を実体験を持って熟知されている分、内容の濃い研究になるのだろうと感じました。今後はこの研究が先行研究となり、ますますウルグアイ日系社会についての知見が広がっていくための基盤になりうる研究だと思いました。
- ・ 小さな文字のポスター展に戸惑ったが、音声ガイドがユニーク。概要が優しくつかめました。ウルグアイ、コロナ禍の外国語対応など幅広い問題意識の学生が集まっていることが分かりました。現代社会はいろいろな問題があるわけですが、これだけ多彩な人たちがふ

だん、どんな議論が展開されているのかなと興味がわきました。

- ・ 聞き取りやすい速度で発表されていたと思います。パソコンで見せていただきましたが、ポスターは細かいところは、はっきりわかりませんでした。やはり、実物を見せていただく方が良いかと思います。

発表参加者の声

- ・ 今回のポスター発表を通じて、自己の研究領域の基礎的な部分を明確にすることができ、今後の研究への示唆を得られた。また、他大学院からの発表にも大いに啓発された。
- ・ 時間がかかり大変だったが企画、発案、実行とつながって実践でき自信となった。合同ゼミの課題として位置付けられているので他の院生にも広がるといい。今年度初の対面発表だったので先生方も楽しそうだった。
- ・ 観覧者の声で自分が作成したポスターに対し速くダイレクトに反応があったので達成感があった。音声は、5～10分と幅を持たせてもよいと思った。私たちのポスター発表を通じた研究の発信が小さくても確実な一歩となったことで充実感があった。

実行委員の感想

感染が収束した場合、オンラインは実施しないという選択肢もあるが、遠方からでも観覧できるため、ハイブリッド形式で実施する意義に改めて気づいた。

ポスターが明瞭に見えるようなパソコン設定や音声の再生方法を伝えること、今後も運営面での改善を目指し、他の研究科や他大学院の学生にも参加を呼びかけ、さらなる研究交流へとつなげたい。

通常の来場者を迎え広い展示スペースで観覧者との対話が自由にできる日を待ちながら、今後も改善し継続していきたい。

謝辞

本発表会の開催にご協力いただいた多文化共生研究所、新型コロナウイルス感染症対策室会議、学務課、「国際文化特殊演習 b」クラス、県大祭実行委員会、他大学からの参加者、観覧者、写真撮影に応じてくださった学部生ほか、関係者の皆様に深く感謝致します。